

# 埼玉育ちのグローバル人

## 世界の果てに住んでみた

### 第1回 「サモア：常夏の島に住んでみた」

#### 平成29年度「埼玉発世界行き」奨学生

駒橋 冴季さん



埼玉県マスコット「コバトン」

みなさま、はじめまして。駒橋冴季と申します。今回のリレーエッセイを担当させていただくことになりました。これまで青年海外協力隊として南太平洋のサモア、大学院留学生としてヨーロッパのイギリス、NGO 駐在員としてアフリカのケニアに長期滞在してきました。他にも20か国以上の国を訪れてボランティア活動や旅行をしてきました。それらの経験を通して見てきたもの、感じたことをみなさんに少しでもお伝え出来たらなと思っています。

さて突然ですが、みなさんは「世界の果て」と聞いて、どんな場所を想像しますか？普通の人は一生涯に一度も行かないような場所でしょうか。私が行ったサモアも、日本人の99%は行かない国と紹介されたことがあるそうです(出典は不明ですが)。



サモアの海

サモアには青年海外協力隊として派遣されました。元々日本でシステムエンジニアとして働いていた

ので、サモアでは学校のコンピュータ教員として活動しました。任地は首都のある島からフェリーで移動した離島の小さな村にあり、目の前に広がる海を毎日見られるのがとても幸せでした。



生徒との写真

サモアでの2年間では、楽しかったことも辛かったことも数え切れないほどありますが、私の価値観が一番変わったと思うのは家族観ではないかと思っています。

サモアの人々は家族をととても大切にしています。例えば、一人暮らしという概念が無く、一人暮らし用の物件がほとんど無いです。首都にある大学に進学する場合は、首都に住んでいる親戚の家に住みます。そのため、私が学校の敷地内の家に一人で住んでいると言うといつも驚かれて、お昼ご飯や晩御飯を食べにおいでとよく誘ってもらい、お言

葉に甘えてよく遊びに行っていました。サモア人の家は基本的に大広間がどんとあることが多く、寝室はありますが寝るとき以外は家族みんなが大広間にいることが多いです。大体大人たちはうちわを仰ぎながら砂糖たっぷりの紅茶を飲んでおしゃべりを楽しみ、子どもたちは床で勉強したりお絵かきをしたりスマホやパソコンで遊んだりしていました。もちろん掃除をしたり、ご飯を準備したりもしますが、それも子どもたちがやるが多く、大人は子どもに指示しながらあまり動きません。親は絶対的な存在で、子どもは親を尊敬する文化が根付いていました。

また国民の大半が敬虔なクリスチャンなので、日曜日の朝は必ず教会に行きます。宗派にもよりますが、私のいた地域では全身白い服を来て教会に行きミサを行い、お昼はごちそうを食べて、全員で昼寝し、午後もミサに行く、といった流れです。そして、ここでも基本的に家族全員で行動を共にします。また父の日、母の日、子どもの日には、教会で必ず催し物が行われ、家族に対する感謝の想いを歌や踊りで伝えます。泣き出す人もいるほど感動的で、家族という存在がサモア人の人生にとって本当に大きなものなのだと感じました。



教会での母の日イベント

私はそれまで日本で生まれ育ち、もちろん家族に感謝はしていたものの、サモア人に比べると家族に対する想いは強くなかったと気づきました。日本ではもっと自立主義というか、そこまで家族に依存しない傾向があるように思います。でも、サモアでの生活を通して、これからはもっと家族に対する感謝を伝えたい、家族に対してできることをもってしていきたい、さらに将来自分が新しい家

族を持った時に愛情をふんだんに注げるようになりたいと強く思うようになりました。